

## トップダウン方式の指導により同世代間の対人関係の改善が見られた一例

言語聴覚士学科

### 【背景】

アスペルガー症候群とは、DSM-5では自閉症スペクトラム障害に分類され、社会性コミュニケーションに著名な障害を示すと表記されている。上野(1997)は、ソーシャルスキルの育ちに関係する要因として、①社会的認知力の弱さ②社会的行動レパートリーの少なさ③言語能力の弱さの三点を挙げている<sup>1)</sup>。今回、社会的行動のレパートリーを増やすために、ことばの相談室で同世代とのかかわりを目的としたソーシャルスキルトレーニング(以下SST)を試みた訓練を7回にわたり行ったのでここに報告する。

### 【対象者および方法】

17歳男児、医学的診断名はアスペルガー症候群の疑い。主訴は「人の気持ちがわからない」、「友達と積極的に関わりたい」。

### 【訓練計画】

本人はすでに17才であり能力的に弱いところを伸ばすのは難しいと考え、本人の能力を活用していくトップダウン方式の指導を採用した。トップダウン指導とは、今の力でこの子が社会に出るとしたら、今どういう事を身に付ける必要があるかという視点に着目した指導法<sup>2)</sup>である。

主訴から目標を以下のように設定した。

長期目標：場面や人に合わせたコミュニケーションが取れる。

短期目標：①主体的に同世代と関われる。

②他者の内面を意識する。

訓練はSSTの重要項目に基づき個別訓練でモデリング、合同訓練でロールプレイング、自己紹介、他者評価が出来るよう訓練プログラムを作成した。

### 【訓練内容】

会話に焦点を合わせたテーマを設定し話し方のモデリングを行い合同訓練でロールプレイングを実施し、その様子をビデオ撮影した。その映像を見ながらフィードバックを行い、ワークシートを用いて評価内容を視覚化した。また、毎回合同訓練を行う相手の性格印象を聴取した。

### 【結果】

会話場面では衝動的に話してしまう事が多かったが、訓練を重ねるごとに相手に質問をする様子が見られ、第七回の訓練では5回質問して相手の話を引き出す様子が見られた。性格把握では「野球好き」という表面的な理解から「話を熱心に聞いてくれて優しい、親切、真面目、積極的」と内面へ視点が変化した。

### 【考察】

ソーシャルスキルの未熟な子どもは仲間から避けられることも多く<sup>3)</sup>、自己肯定感の低下を招く。このことから結果的にソーシャルスキルを学習したり、使用したりする経験が限られてしまう。本児も障がい特性から同年代との関わりが少なかったと考えられる。他者に興味を持つようになっても、以上のことからソーシャルスキルが育っておらず、主訴に繋がったと思われる。SSTを通じて場面でのコミュニケーション経験を重ねたことで相手の話しを聞きだす話し方を身につけられたと考える。また、視覚優位な特性を活かし、情報を視覚化したことで社会的行動の理解につながったと思われる。

### 【まとめ】

短期目標は達成できたと考えているが、長期目標は日常のすべての場面においてロールプレイや分析が行えたとは言えない。本児自身が日常で経験した場面、関わった人ごとに視覚的に情報を整理し分析するとともに、会話方略を活用して行くことが重要である。

### 【引用・参考文献】

- 1) 上野一彦：特別支援教育「実践」ソーシャルスキルマニュアル。明治図書。東京、2006、30。
- 2) 竹田契一：これから始める特別支援教育と軽度発達障害。明治図書。東京、2004、87-124。
- 3) 服部美佳子：LDと社会性。LD学習障害—研究と実践—。6(2)、1998、15-20。
- 4) 深浦順一・内山千鶴子：言語聴覚士のための臨床実習テキスト。建帛社。東京、2017、29-34。